

2025年1月12日顕現後第1主日

イザヤ書43章1-7節

使徒言行録10章34-38節

ルカによる福音書3章15-16、21-22節

本日は、顕現後第一主日です。主イエス・キリスト洗礼の日とも呼ばれます。今までイエス様の誕生（12月25日）、命名（1月1日）、顕現（1月6日）と学んできましたが、本日は、洗礼の時の事柄を学びます。すぐに洗礼となっているのは、元来顕現日の内容がイエス様の洗礼についてであったからです。各正教会で、神現祭（顕現日）に人々が沐浴（水に入る）をするのは、そのためです。本日は、改めて洗礼について学びます。

今年の降臨節から、日課が新しい試用版に基づいています。福音書の箇所は変わりませんが、旧約、詩編、使徒書（使徒言行録）がかわりました。旧約は、以前の「主の僕の召命」に関する箇所から、「イスラエルを贖う主」に関する箇所となりました。それまでは、イエス様が預言書イザヤ書に記されている「主の僕」に関連していることを学んだのですが、新しい日課では、イエス様を通して実現する贖いが、主なる神様がイスラエルに臨んでおられた贖いに関連することを学びます。日課の箇所は変わりましたが、旧約日課から学ぶのは、主なる神様は、時間と空間を超えて、すべての被造物を贖うことを望んでおられることです。

使徒書は、使徒言行録を読むことは同じですが、箇所がカイサリアでペトロがローマの百人隊長コルネリウスに福音を伝えるところから、サマリアで福音が伝えられたのでペトロとヨハネが確認に行く箇所へと変わりました。両箇所とも洗礼が中心的な主題ではありませんが、関わっています。それまでの聖書日課では、洗礼という行為が洗礼者ヨハネから始まり、イエス様の活動と深くかかわっていることを学びました。新しい日課では、洗礼の際に聖霊が降ることの重要性について学びます。ただし、新しい箇所に、「主イエスの名によって洗礼」とあるのは重要です。

わたしたちは洗礼について、「父と子と聖霊の名によって」と三位一体を前提として認識します。また聖餐式でいつもニケア信条を通して「罪の赦しのための唯一の洗礼」とその意味を確認します。しかし、『聖書』には直接的にそのようにしなさいはありません。また、他方で、使徒言行録には、教会の初めの頃の洗礼について記述があります。アポロという人物について、「彼は主の道をよく学び、イエスのことについて熱心に語り、また正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった」（使徒18:25）とあり、またパウロがエフェソで信仰に入った人たちについて確認したとき「パウロが、『それでは、どんな洗礼を受けたのですか』と言うと、彼らは、『ヨハネの洗礼です』と言った」（使徒19:3）ともあります。イエス様を信じるようになった人でも、洗礼者ヨハネの洗礼だけの人もいたのです。後者のお話では、その後、本日の箇所と同じようにパウロが「主イエスの名」による洗礼を受け、聖霊が降ります。1世紀末から2世紀の初

めぐろに書かれたと思われる使徒言行録が、教会の始まりころの洗礼について、そのように語っているのは大切なことです。ただし、一世紀末から二世紀初頭の教会でまだ洗礼が秘儀として定まっていなかったということではありません。『聖書』には属していませんが、使徒言行録と同じころに書かれた文書「ディダケー」に、洗礼について「父と子と聖霊の名によって流水で洗礼を授けなさい」とあるからです。使徒言行録は、洗礼において何が大切か、そのことを示しているのです。

使徒言行録が書かれた時代、様々な教会において、おそらく洗礼は「父と子と聖霊」の名によって行われていたと思います。そして、そうであるがゆえに、使徒言行録は、洗礼に大切なのは、聖霊が降るということだと強調しているのです。ただし、聖霊が降るとは、洗礼が呪術のように聖霊が降る行為、あるいは聖霊を降臨させる秘技・術という意味ではありません。聖霊が降るからこそ秘儀になるということです。そのことは、なぜ洗礼を受けるのか、あるいは洗礼者ヨハネの洗礼だけはなぜいけないのか、あるいは主イエスの名だけでもなぜいけないのか、そのこととも関連します。それは、端的に言えば、イエス様の十字架と復活がなければ、その愛を理解したことにならないからです。そして、その理解とは、人間の理性を超えて、聖霊による導きに基づいて初めて可能となるからです。

本日の福音書に「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた」（ルカ 3：15）とあります。これは洗礼者ヨハネを立派な指導者として理解しまた期待したということです。人間の理性的判断によるものです。洗礼者ヨハネは、王や指導者の罪を鋭く批判しましたので、その人を指導者と認識することは、決して悪い判断ではないと思います。しかし、その先に真の平和があるかどうかは不明です。洗礼者ヨハネが捕らえられ処刑されるという結末は、その先にあるのは平和があるとしても、勝敗によって定まる平和に他ならないことを示しているからです。イエス様も、最後は捕らえられ十字架上で死を迎えました。その点は洗礼者ヨハネと同じです。しかし、復活があり、それが終わりではないことを示されました。そして、その死が敗北の死ではなく、すべての人に愛を示す勝利の死であることを示しました。そこが大きく異なるのであり、この愛に基づいて行われるのが、「父と子と聖霊」の名による洗礼です。

クリスマスにおいて、イエス様がわたしたち同じように生まれたことを学びました。そして本日、わたしたちと同じように洗礼を受けたことを学びました。そして、これから教会歴は大斎節、復活日に向けて、イエス様が活動され、わたしたちと同じように人間として死を迎えたことを学びます。そのご生涯がわたしたちにとって救いであるのは、それらがすべて聖霊によって導かれているからです。聖霊降臨を迎えた教会も洗礼を受けたわたしたち一人ひとりも同じです。聖霊が降ったかどうかは、客観的には実証はできませんが、そう信じるからこそ、わたしたちは、自分の思いを超えて信仰を保ちまたそれを具体化できるのです。これからも聖霊に導かれて、主の愛を示す業に励みたいと思います。